2015 年度入学式　学長式辞

私は今朝もいつも通りに大学に行き、そして入学式の行われるこの会場にやって来ました。私の大好きな埼玉大学のキャンパスは今日も、趣ある美しさを誇っています。桜の花が名残惜しそうに未だ存在感を放つとともに、それに置き換わるかのように、欅をはじめとした木々のフレッシュでやわらかな緑の葉が芽吹き、春の装いを色濃くしていました。

このように希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに入学式を迎えられた 1,679 名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。埼玉大学の役員、教員 450 名、職員 220 名、そして 7,000 名の在学生を代表して、皆さんの入学を心から歓迎します。また、式典にご参列下さいましたご家族の皆様方に対しましても、心からお慶びを申し上げます。

私の大学時代の恩師である岡本舜三先生は、埼玉大学の第５代学長を務められていた 40 年ほど前に、荒川河川敷の、当時は何もなかった埼玉大学キャンパスにたくさんの木々を植えました。その木々が育って今の美しいキャンパスがあります。時の流れという時間軸の重みと、最初の動き、すなわち初動という時間軸原点の大切さを教えてくれます。今日、ここに入学された皆さんはそれぞれに、決意も新たに大学での生活を想い描いていることと思います。その気持ちをいつまでも大切にして下さい。そして、今日を原点として、新たな時間軸に沿って順調に歩みを進め、大きく成長していって下さい。

私は 1971 年に当時の理工学部建設基礎工学科に入学し、大学生としての４年間を埼玉大学で過ごしています。その私が学長になって１年が過ぎました。この間、同窓生の一人として、母校、埼玉大学をより一層輝かせたいとの想いは強くなるばかりです。これからも、自他共に誇れる「知の府」としての埼玉大学を、活気があり活力みなぎる大学として埼玉から世界へと展開していきます。そして、埼玉大学は、学部という組織の枠や人文・社会・自然科学という学問の枠を越えた真の連携とシナジーをもたらし、潜在的能力を組織的に発揮させて、優れた教育研究拠点としての光を放ち輝きます。その上で、地域のニーズに応じた人材育成や地域活性化機関としての役割をも積極的に担っていきます。新たに埼大生になった皆さんにあっても、それぞれにそれぞれの場で活躍し、ダイナミックに変革する埼玉大学の重要な構成員として、存在感ある埼玉大学の一翼を担って下さい。

日本の社会が抱える重大な課題にグローバリゼーション Globalization とイノベーション Innovation があります。国を越え、あるいは専門分野の枠を超えて交流し、ものごとを思考する、判断する、表現する、そして新しい価値を創造する、そういった力をもつ人材が社会で求められています。

国立大学に期待される一機能である、社会の変革を担うグローバル人材の育成についても、埼玉大学では構想を具体化し、多様な取組を行ってきています。また、埼玉大学には 500 名を超える留学生が同じキャンパスで学び、大学生活を共にしています。「グローバル」に関わることのできる沢山の機会を皆さん自ら、積極的に捉えることもとても重要です。

先程，埼玉大学は地域のニーズに応じた人材育成や地域活性化機関としての役割をも積極的に担っていくことをお話ししました。このことと、埼玉大学のグローバル人材育成機能とがどのように関連するのか、疑問に思う人もいるかも知れません。また、グローバル人材とは一体何でしょうか？　英語によるコミュニケーション能力、柔軟な思考力、異文化の理解

力と適応力、等々の能力を有し、グローバルマインドを持った人材、でしょうか？

これらの疑問や問いについては、元東京大学総長である 佐々木毅 先生が IDE（Institute for Development of Higher Education）大学協会の会誌に示した「グローバル人材と「人材の高度化」との間」と題する小論（*IDE 現代の高等教育*, Vol. 567, 巻頭言, 2015 年 1 月）にヒントがあります。佐々木先生によれば、世界で通用し活躍する人材に地域へのこだわりは決してプラスの意味を持たず、彼らは究極的には社会的に見て「根無し草」であり得ます。他方、どの社会も個性と歴史を持ち、地域に根を生やしている以上、「根無し草」ばかり集めても社会を作ることができません。社会と地域の将来を慮り、多くの人々を糾合して新しい姿を描き、実践していく人材には何より地域性へのこだわりが必要です。大学は、何が日本の将来的課題であるかを主体的に捉え、異口同音にグローバル人材育成を目標に掲げるのではなく、個性を発揮して、社会の実態に目を据えた「人材の高度化」を目指すべきです。

環境問題を語るうえで非常に重要で世界的に有名な「Think Globally, Act Locally.」（地球規模で考え、足元から行動せよ。）というフレーズ があります。ローカル Local があってのグローバル Global です。埼玉大学は、グローバル化の表層のみを追うことなく、ローカルに根ざした高度人材の育成を行います。皆さんには、一人一人が「グローバル人材とは何か」をもう一度考え、行動してほしいと思います。

次に、イノベーションについてです。そもそも、イノベーションとは何でしょうか？ Oxford 辞典によれば、「the introduction of new things, ideas or ways of doing something」とあります。そうです。イノベーションとは単に技術革新を意味しません。また、有名な経営学者であるピーター ドラッカーの言にあるように、「Innovation is not flash of genius.」つまり、イノベーションは天才によるひらめきでもありません。イノベーションとは、世の中に普及する新しい概念を全般に指す言葉です。例えば、Apple 創設者であるスティーブ ジョブズがすでにあるものの組み合わせから新しいライフスタイルを作り出したことは、まさしくイノベーションです。そして、このようなイノベーションには、ジョブズがそうであったように、人と人の結びつきをうまく活用する力をもつことが重要であると言われています。イノベーションを支えるのは、主体性をもって協働する私たち一人一人ということにもなります。

科学技術・学術審議会は 2015 年 1 月、「我が国の中長期を展望した科学技術イノベーション政策について」と題した中間取りまとめを公表しました。そこには、ゲーテの言葉「Knowing is not enough. We must apply. Willing is not enough. We must do.」つまり「知るだけでは不十分、知の活用が必要。意思だけでは不十分、実行が必要である。」を引用しつつ、次のように記述しています。「イノベーション創出に向けて、基礎となる科学的な成果を着実に生み出すことはもとより、近未来を見据えて社会実装し、あるべき社会に変えていくための大胆な連携や交流の仕組みが必要である。我が国が進むべき道において自らなすべきことは何か。未来社会を担うべき若者たちの社会デザイン力と柔軟、迅速な行動力が鍵を握る。」

このようにイノベーションを考えると、知識を得ることだけではない、大学における学問の在り方が見えてきます。「思考の整理学」など、たくさんの著書で知られるエッセイスト、外山滋比古氏も著書「知的生活習慣」（筑摩書房, 2015 年）において、知識だけでない思考の重要性を説いています。知ることはもちろん大切であり、思うことも悪くはないが, それ以上に、自己責任でものを考える習慣を身につけることが大切です。腑に落ちないこと、わ

からないこと、不思議なことに出会ったら、素朴に「なぜ」「どうして」などと自問します。すぐに本を調べたりすることは必ずしも賢明ではなく、疑問はいつまでも疑問として抱いていれば、そこにおのずから独自の思考が生まれるきっかけになります。知識そのものは無力で、生活の中で使用したときにはじめて力を出します。生活あってこその知識ですが、長い間、学校教育を受けていると、知識のための知識になることが少なくない、としています。

一方、村上陽一郎氏は雑誌「学鐙」（丸善出版株式会社，夏号，Vol.111, No.2, 2014 年）の「競争的環境と学問」と題した小論の中で、人間は、原理的に、結果を問うことなしに、常に知識を求める存在であること、社会的なリターンを目指さない研究への支援は、人間の本性に敬意を払うことに他ならないことを指摘した上でこう続けています。「人間の向上の動機の一つとして、競争が重要である。もっとも、その際の競争相手は必ずしも他者ではない。むしろ、自身の中にある。現状に満足する心、「まあいいか」と自分を納得させてしまう心、そうした心と競争する向上の思いを忘れては、人間は、退廃への途を辿るだけになってしまう。「より高い」何ものかを目指すことは、人間にとって不可欠の動機であろう。」

さらに、Robert S. Kaplan 教授は、著書「ハーバードの自分を知る技術　悩めるエリートたちの人生戦略ロードマップ」 *What you're Really Meant to Do, A Road Map for Reaching to Your Unique Potential*（福井久美子訳、阪急コミュニケーションズ、2014 年）の中で、使命感をもって働き仕事を楽しむ人は、質の高い仕事をする傾向が強いこと、その際に潜在能力をフルに引き出すには、知性とスキルだけでは限界があり、情熱が不可欠であることを説いています。情熱は揺るぎのない目的があるときや、楽しいと感じられる仕事をやるときに生まれ、困難を克服するのに欠かせない燃料であり、情熱があるからこそ、私たちは高みを目指して戦い続けることができるとも言っています。

Kaplan 教授は、「何をやりたいか？」しっかりした自己認識と自信を持ち合わせていないと、何かが心に響いてきてもそれに気付かないことにも言及しています。このうち、「自信」については、養老孟司氏が著書「「自分」の壁」（新潮新書、2014 年）の中で、人はなにかにぶつかり、迷い、挑戦し、失敗し、ということを繰り返すが、そうやって自分で育ててきた感覚のことを「自信」というとしています。失敗の繰り返しにより自分を育てることの大切さを個人としても十分に認識する必要があります。失敗を前提として人は行動するわけではありませんが、失敗を恐れて行動しないのでは人は自信を持てず、前に進めません。

一方、「気付き」に関連してはセレンディピティ Serendipity という言葉があります。求められていない、意図的でない、幸運な偶発的に起こった出来事や経験を意味したり、何かを探しているときに、探しているものとは別の価値あるものを見つける能力を指したりします。作家 Horace Walpole が 1754 年に生み出した造語で、子供のときに読んだ「セレンディップの 3 人の王子（The Three Princes of Serendip）」という童話の中で、現在のスリランカであるセレンディップ王国の 3 人の王子が偶然と洞察力を元に、旅の途中で探し求めているものを発見することにちなんだものだそうです。私が初めてセレンディピティという言葉を耳にしたのは、白川英樹博士が 2000 年に、導電プラスチックの発見・開発によりノーベル化学賞を受賞された際です。白川先生は、間違って通常の 1000 倍もの濃度の触媒を使ってしまい、その失敗が生み出した偶然を新発見に結びつけたそうで、ノーベル賞の受賞はセレンディピティであり、できるだけ多くのことを学び、沢山の経験をし、何事にも興味を抱くことで、偶然は起こるものであるというお話をされています。セレンディピティは単なる幸運ではなく、常に知性を磨き、何かを追い求めているものにしか与えられない能力です。旺盛な好奇

心と執着心、そして観察力や感覚の鋭さで探し当てる洞察力が必要です。

以上、知識、思考、高み、情熱、自信、セレンディピティといった、多様な５人の識者の言葉を参照しながら、大学における皆さんの学問への取り組み方と心構えについてお話ししてきました。大学では、旺盛な好奇心と執着心を維持し、**知識**を得るだけに留まることなく、自ら**思考**する習慣を身につけて下さい。そして、失敗を恐れることなく、**情熱**を持って**高み**を目指して下さい。その際、壁にぶつかることも多々あります。そんな時、ゲーテの言葉：

Knowing is not enough. We must apply. Willing is not enough. We must do.

この言葉を胸に、自分の考えを柔軟にして迅速に行動し、困難に立ち向かって下さい。このプロセスを通じて**自信**を深め、一つずつ困難を乗り越えて成長を続けてほしいと思います。さらに、洞察力を身に付ければ、**セレンディピティ**の準備は整います。皆さんの埼玉大学での健闘を大いに期待します。

私が大学生として過ごした埼玉大学での４年間には先輩，同輩，後輩といった仲間や多様な先生方など、多くの出会いがありました。中でも、恩師お二人との出会いはとても大きく、講義や卒業研究での指導、さらには日頃のお話に触発され、学問の面白さ、拡がり、奥深さや大学の在り方を実感しました。そのことが、その後の私の大学における研究キャリア、つまり世界最長スパンを誇る明石海峡大橋の風に対する設計をはじめ、構造物の振動を専門とした研究のキャリアや、今の私の学長としてのポジションの原点になっています。お一人は最初にお話しした故 岡本舜三 先生。後に世界の Legend of Earthquake Engineering の一人に選ばれた地震工学の世界的権威でもあり、構造物の振動現象の持つ不思議さに目覚めさせて頂きました。もうお一人は 秋山成興 先生であり、構造力学の本質を教えて頂くとともに、「君は埼玉大学に戻り、埼玉大学のために学問研究に尽くせ」と諭されました。私の心には両先生の言葉が深く刻まれており、私の研究に対する強い意欲と埼玉大学に対する熱い想いはここから来ています。

今日の入学式では、特別講演として、埼玉大学教育学部を 1993 年にご卒業され、現在、株式会社 NTT 東日本−東北の取締役でいらっしゃる加藤咲子様にお話し頂きます。演題は「これからの 1460 日間にすべきこと、心から好きな こと・もの・ひと の追求を！」。一同窓生として、また皆さんの先輩として、ご自身のキャリアを通じ熱く語って頂きます。皆さんにとっての、埼玉大学における最初の、素晴らしい出会いになるものと思います。

さあ、新たな時間軸の始まりです。大学での生活は皆さんの長い人生の中でとても重要な時期、しかも時間軸原点からの限られた最初の４年間です。皆さんが、学問や人との出会いをはじめ様々なことに触発され、時間とともに目的意識をより一層明確にして充実した大学生活を送り、さらに成長して行かれることを最後に祈念して、私の式辞とします。

平成 27 年 4 月 8 日

埼玉大学長　山口宏樹